随想　タコと人間

～地球上すべての生命に感情や知性があるのかも…～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

スマホでネット情報を当たっていると、ときどき『これは…』と思わされるモノに行き当たる。過日、ネットサーフィンをしていて、《タコが全身を使い、感情を表せるという驚愕事実》という記述に出会った。

タコといえば酢ダコやタコブツでおなじみの食べ物としか認識していなかった筆者にとって、このタイトルだけでも興味を引かれた。

この記事は《琉球大学理学部教授の池田穣先生》による。興味ある概要を以下に紹介する。

●まずい食事に異を唱えたタコ

取り上げているタコは、ヒョウの図柄に似た紋を持つヒョウモンダコの一種オオマルモンダコである。実験のために飼育しているこのタコの幼体に餌として凍結サクラエビを溶解して与えるのだそうだ。ある日に与えたエサは解凍が不十分であった。かの幼体はいつものようにエサを巣の近くへ持っていった。しかし突然幼体は浮かび上がり、先ほど与えたエサを、それを与えた実験者（学生）に向けて水中で投げ付け、八本の腕をバフバフ（と表現されている）開閉し（腕の付け根にある、筆者付記）口を見せつけた。この腕の開閉の際には、体表のリング模様をギラギラ（と表現されている）点滅、半溶解のまずい食事を供されたオオマルモンダコの幼体は、明らかに憤慨したのだ。この幼体は、水槽の外に立つ巨人を、自分に毎日食事をくれるものと認識していて、不快な思いをさせた巨人にあからさまに怒りをぶつけた。表情どころか、体全体で憤慨を示した。一連の行動は、幼いタコが、不快や怒りという感覚を持ち合わせているのではないか、と思わせるものであった（この一連の出来事を含めた幼体の事象については二〇一九年の軟体動物の専門雑誌《モラスカン・リサーチ》に掲載）。

この項は内容・表現共に大いに和（なご）まされるので、極力原文に近くまとめた。以降についても興味深い内容であるが、紙幅が足りないため抄訳する。

●生物の『表現』には社会性との深い繋がりが

《表情》はヒトに与えられている特徴で、顔だけでなく仕草・行動にも反映されてしまう。個人にとっては内心を知られるという意味では不利になることもあり得るが、社会性動物にとっては共生（群として生きる、筆者注）することは（その個体の、筆者注）生き残りに必須であり、共生のツールとして表現は重要な情報となる。群生する動物において、捕食者の存在を認知するのもエサの存在情報を共有するのも、生存の必須条件であり、個体の表現情報を群として共有することは大いに有利である。

ヒトだけでなく、すべての動物に共通の表現力があることは、進化の過程で失われることなく維持された古代からの特性といえる。

●生物学的にタコは人間の祖先

頭足類に属するタコやイカはその発現時期は明確でないが、考古学的な知見からカンブリア紀であったと考えられている。別の見地から中生代との見方もあるが、いずれにしても哺乳類や鳥類（というより恐竜ではないのか?!　とは筆者の意見）よりずっと古い太古の時代である。

もしも、この太古に発現したタコが体表の色素細胞・反射細胞や神経や大きな嚢やレンズ眼を有していたとすれば、先のオオマルモンダコのように表現による情報を発していたかもしれない。

・・・以上引用・抄訳・・・

タコに感情があり、社会構造（エサを与える学生の存在と与えられる自分）を認識した上で、自己主張をする、という事象が現実にあるとしたら（教授の文意をくむとすれば、多分あるのであろう）、意外すぎることではあるが、果樹農業において、モーツァルトを聞かせると収穫量が増えるとか甘味が増す、といったニュースに触れた記憶もあり、一概に否定できないように感じる。

《生き延びること、子孫を残すこと》が生命の究極の命題である、とは筆者の理解であるが、多分多くの方々にも納得頂けると思う。そのための行動はすべて《知性》と関連付けられよう。

筆者のラボのロータリーや庭に、赤い実を付ける植木（くろがねもち?）や山桜が植えてある。約一〇年前のことだが、これらの植木のそれぞれの枝が相当に枯れて徐々に弱ってきているように思われた。

見栄えも悪くなり、妻とどうするか、を話し合った。

『ダメなモノなら、思い切って伐（き）ってしまおうか?!』と筆者。

『そうね！　かわいそうでも、仕方ないね!!』と妻。

それがなんと、その年の秋には、ロータリーにある前出の植木は赤い実をいっぱいに付け、翌年の春には山桜が精いっぱいの花を咲かせたのである。もちろん両方共、今もラボに生き残っている。この二本の木に筆者たちの気持ちが伝わったとも思える。

確かに生物の進化を振り返ると、単細胞生物（原生生物）から動物あるいは植物へ姿を変え、さらに、体腔動物（原体腔・新体腔動物）、節足動物、軟体動物等々に姿を変えて、ついには脊椎動物へと進化を遂げる過程を、ヒトでは受精卵細胞から誕生に至るまでの《個体発生》の過程でその概略を順繰りにたどっている。

すなわち、卵細胞（単細胞動物）、桑実分裂期から脊髄が形成される時期（脊策動物）を経て、尻尾のある期間として、えらを持つ魚類の過程、鳥類（恐竜期?!）から哺乳類に至る脊椎動物の過程を経て、類人猿の胎児に酷似する出生前のすべてをたどる。この過程は地球史で生物のたどった道のりを、短縮して表現しているような印象を受ける。

感情が人間にしかないとつい思ってしまう自分、それこそがヒトのエゴであり、実は地球上の生物すべてに《感情・知性》が有るのかもしれない、等と思いを馳せながら、この記事を読んだ。

生命を繋ぐために、他の生命を犠牲にするのは当たり前、と日常こうした事柄にほとんど頓着することはないが、改めて自分自身が生きるために頂いている《生命》それぞれへの感謝の気持ちを新たにせねば…と感じた次第である。